

19. 五条遺跡

調査地 野洲市五条字里ノ内 228 番 1
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 3 月 10 日

1. 調査経過

五条遺跡は、弥生時代から江戸時代に至る集落跡として周知されている。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、建物計画範囲において調査区を一つ設定し、現地表面下約 1.4m（標高 85.4m）まで掘り下げ、遺構・遺物の有無の確認に努めた。

2. 調査成果

基本層序は現地表面下約 0.2m まで造成土、その下に暗灰色土層、褐色粘質土、暗灰黄色粘土層、灰オリーブ色シルト層、褐灰色粘土層と続く。現地表面下約 1.1m（標高 85.7m）で確認した灰オリーブ色シルト上面を遺構面として柱穴 1 基（直径 0.5 ～ 0.6m、深さ 0.2m）を検出した。

3. 遺物

1 は土師器の小皿で、口径 5.7cm に復元される。内外面ともにナデ調整を施し、色調は浅黄橙色と呈する。胎土は密で、焼成は良好である。2 は信楽焼のすり鉢で、7 条一組のすり目を有する。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土は 3mm 以下の小石を含む。焼成は良好である。3 は瓦質土器の大皿である。口径 29.4cm に復元され、内外面とも横方向のナデ調整を施す。底部はヘラケズリによって仕上げる。色調は暗赤灰色を呈し、胎土は微砂粒を含む。焼成は良好である。4 は瓦質土器の火鉢である。底部は平底で、外周部の一部に脚部らしきものが剥離した痕跡が残る。全体にナデ調整を施し、色調は黒褐色を呈する。胎土は密で、焼成は良好である。1 ～ 4 のいずれも遺物包含層から出土した。

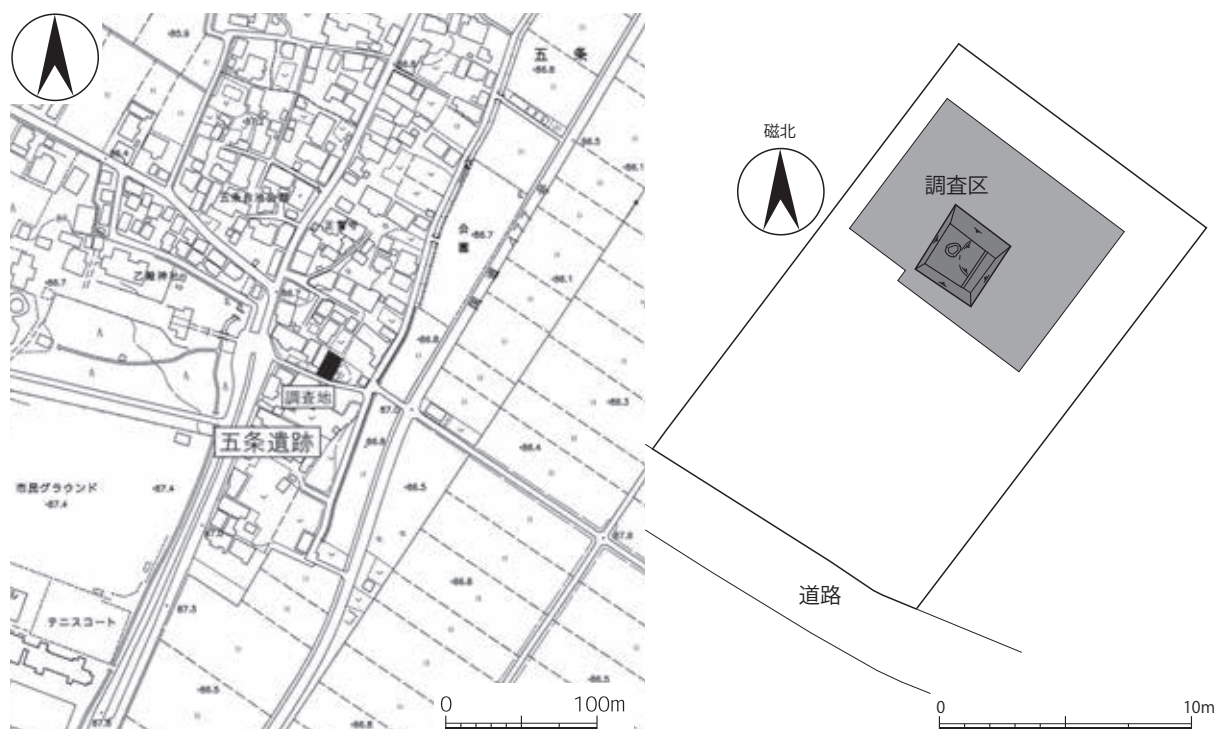


図 1 調査地位置図・調査区配置図

4. まとめ

調査区東側は近世に攪乱を受けており、遺構密度的には低いものの、柱穴1基を検出したことから、当調査地は古代～中世五条遺跡の集落地にあたるものと判断される。(岡山)

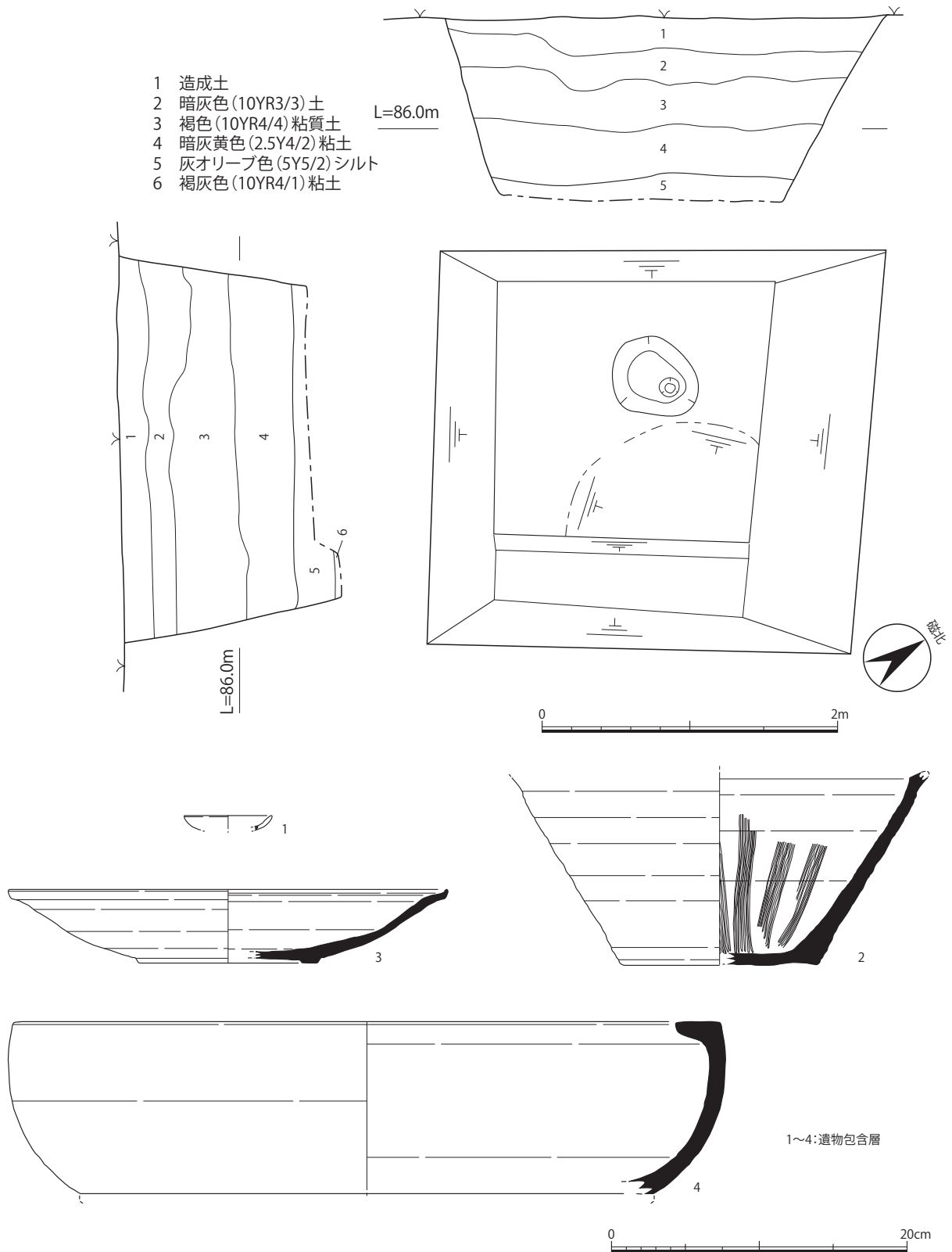


図2 調査区平面図・土層断面図、出土遺物実測図



遺構検出（東より）



周壁土層断面（北東より）



下層確認 1（南東より）



下層確認 2（南より）

20. ^こ ^{しの} ^{はら} 小篠原遺跡

調査地 野洲市^こ ^{しの} ^{はら} 小篠原字^{さわ} ^の ^{くち} 沢ノ口 1531 番
調査原因 集合住宅
調査期間 令和 3 年 3 月 15 日・3 月 16 日

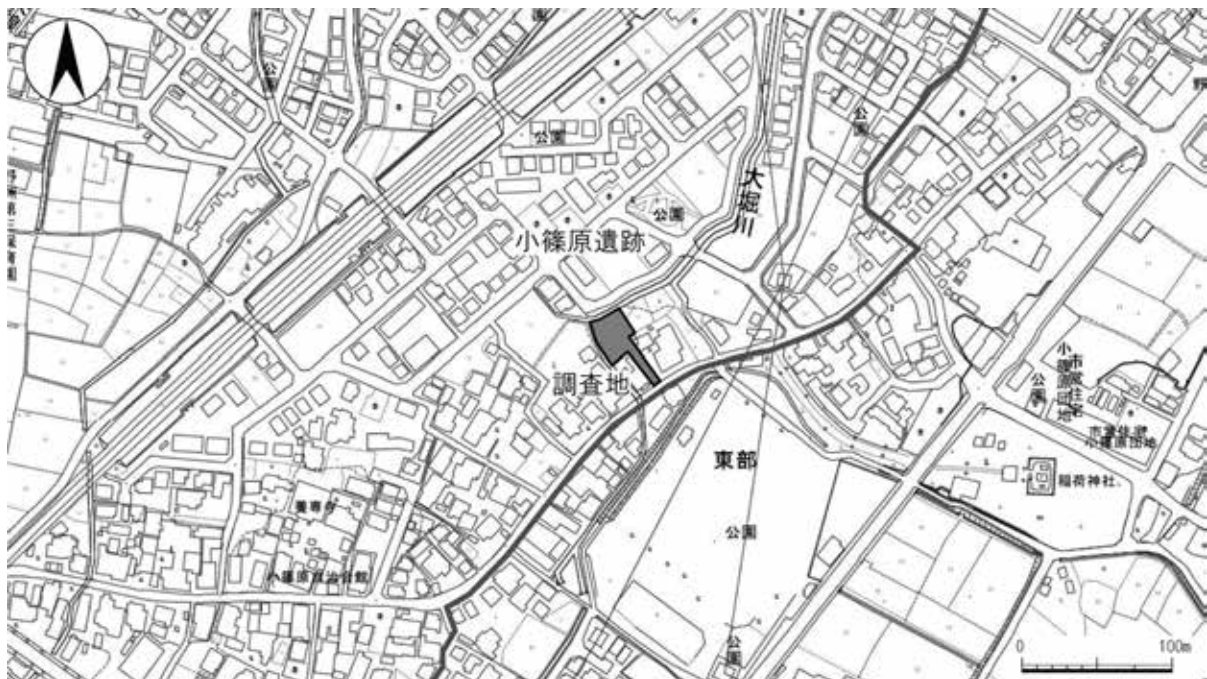
1. 調査に至る経緯

小篠原遺跡は縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡として周知されている遺跡である。本調査地が位置する遺跡東方では、東海道新幹線の沿線にあたる字林ノ腰とその周辺で大型前方後円墳の林ノ腰古墳をはじめ、線路の両側で数基の埋没古墳が検出されている。本調査地は林ノ腰古墳の東方、小篠原遺跡のほぼ東端に位置し、中山道に面している。林ノ腰古墳とは大堀川で隔てられている。林ノ腰古墳は土地区画整理事業に先立つ発掘調査で検出されたもので、古墳が検出された一帯は宅地造成に伴って大部分が発掘調査実施済みである。一方、大堀川をはさんだ本調査地の近隣では街道筋ということもあって古くから家が建ち並んでいたようで、大規模な発掘調査は実施されておらず、個人住宅建設に伴う小規模な調査にとどまっている。

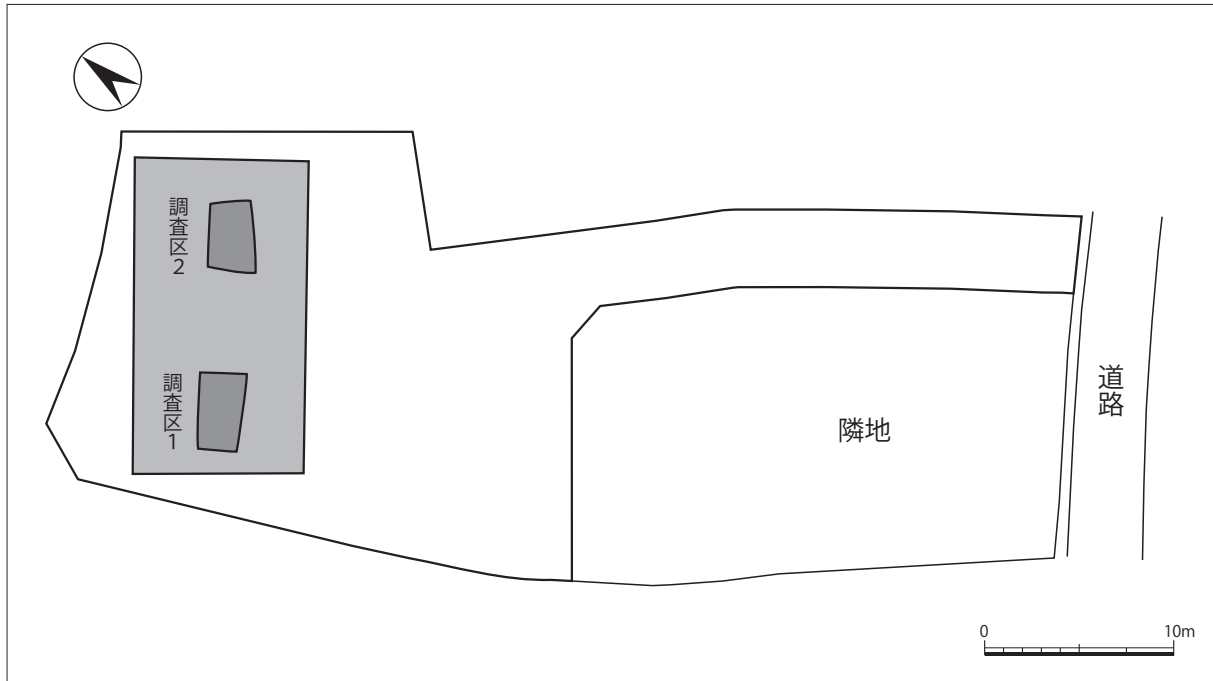
今回の調査は集合住宅建設に伴うもので、建築範囲に調査区を 2 ヶ所設定して遺構・遺物の有無の確認に努めた。調査区面積は約 16㎡であった。なお、調査対象範囲の西側に設定した調査区を調査区 1 とし、東側に設定した調査区を調査区 2 とする。

2. 調査成果

本調査地は、中山道に面した部分は宅地となっていたが、奥の大堀川に面した部分は竹藪となっていた。そのため、造成時の化粧土を除く地表面下約 0.5 ～ 0.75m までは土壌化が著しい。土の質感は畑土に似ており、水気はなく乾燥している。その下は調査区 1 では黄灰色弱粘質シルト層、調査区 2 では黄灰色粘質土・灰黄褐色粘土混じり中砂・細砂層が続く。遺構面は地山直上で、調査区 1 では



第 1 図 調査地位置図



第2図 調査区配置図

灰褐色粘質シルト、調査区2では灰オリーブ色強粘質土の上面である。遺構面の深さは地表面下約1.0m（標高約97.15m）である。

遺 構 今回の工事に伴う表層改良の施工深度が基礎下約1.1mと浅いため、調査では遺構の検出および一部の断割りにとどめたことから、現時点では遺構の全容は明らかでない。調査区1はL字型の断割りで遺構面を確認したに過ぎないが、落込み1基とピット1基を検出した。いずれも大部分は調査区外に広がっていた。調査区2では調査区の大部分を占める落込みを検出した。調査区北東壁に沿って溝状の断割りを入れてみたが、明確な底は検出できなかったため、相応の深さを持つものと考えられる。遺構から水が浸みだしていたため、排水を兼ねて調査区南端にもポンプ穴程度の断割りを入れてみたが、こちらではすぐ地山に到達したため、この落込みは南西から北東に向けて深くなっていることが判明した。全容については今後の調査を待つほかないが、調査地が大堀川に接していることを考えると、旧流路の可能性はある。

遺 物 遺物は土師器、須恵器、瓦質土器、磁器、瓦などである。実測可能な遺物も数点存在したが、紙幅の都合上、やむを得ず割愛した。傾向としては古墳時代頃の遺物も含まれるが、中近世の遺物が大勢を占める。特に、瓦質羽釜の脚部の出土が目立つが、遺構の性格が明らかでない現時点では、羽釜がまとめて投棄されていたものか、羽釜の脚部だけが偶然集まったものかは判断できない。

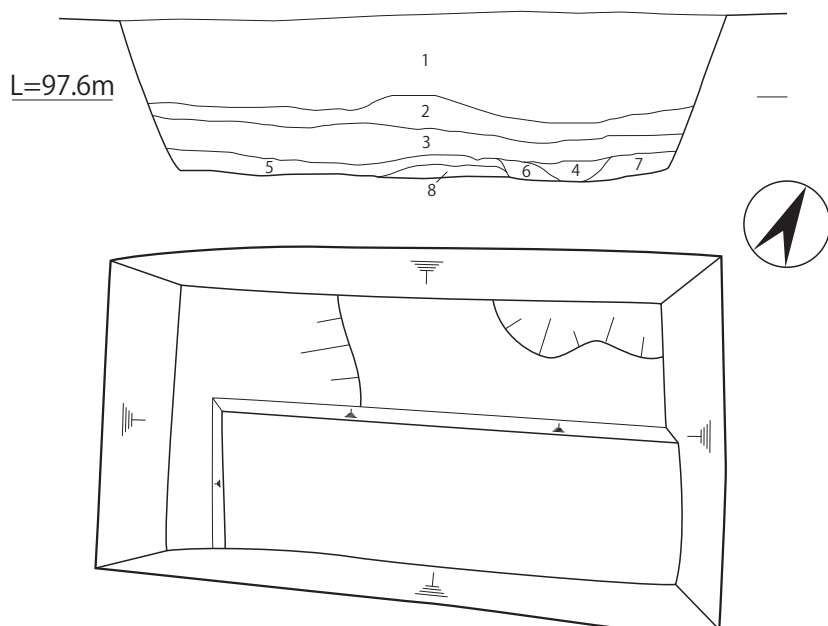
3. まとめ

出土遺物は中世のものが中心であり、そのことから、今回の調査で検出した遺構は古代～中世の所産と考えられる。

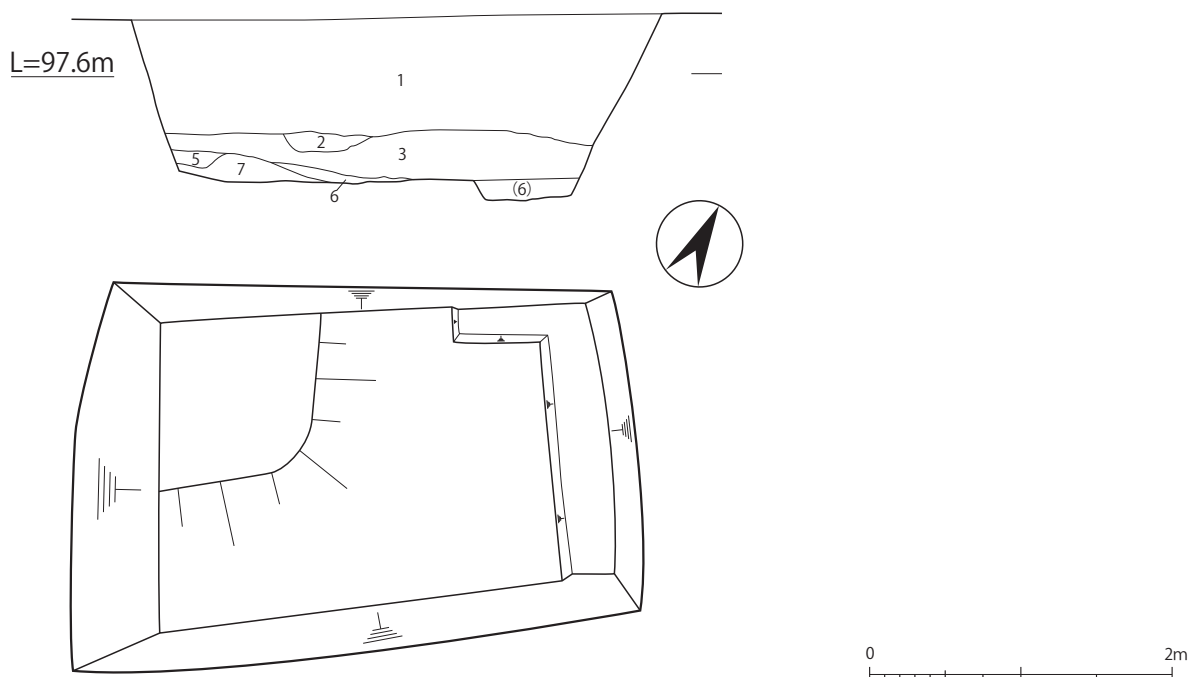
小篠原遺跡の中でも、東端にあたる中山道沿いは家が密集しているためか、新幹線以西に比べると発掘調査の実施例が少ないが、平成7年と平成12年に実施された本調査地近隣での発掘調査では相応の成果が出ているので、紹介したい。

平成7年の発掘調査は個人住宅建設に伴うもので、井戸、土坑、ピットを検出している。井戸は河原石を直径0.6mの円形に積んだもので、掘方は2mを測る。遺物は土師器や瓦質土器、陶磁器など

調査区 1



調査区 2



調査区 1

- 1 造成土・竹林土壌
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト混じり極細砂
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 弱粘質シルト
- 4 黒褐色 (2.5Y3/2) 弱粘質シルト
- 5 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘質土
- 6 灰褐色 (7.5YR4/2) 弱粘質シルト
- 7 黒褐色 (2.5Y3/1) 弱粘質シルト
- 8 灰褐色 (10YR/5/1) 粘質シルト【地山】

調査区 2

- 1 造成土・竹林土壌
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト混じり粘質土
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 (よく締まる)
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土混じり中砂・細砂
- 5 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
- 6 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 弱粘質土
- 7 灰オリーブ色 (5Y5/2) 強粘質土【地山】

第3図 調査区平面図・土層断面図

が出土している。平成 12 年の発掘調査も個人住宅建設に伴うもので、南北方向に延びる溝状遺構を検出している。遺物はこの遺構から土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器、陶器が、それ以外から瓦、土師器、陶器などが出土している。両調査地とも、出土遺物は概ね中世以降のものが多く、街道筋の開発が中世以降に盛んになったものと解釈できる。

本調査地においても前述したとおり遺物の大半は中世以降のもので、先の調査成果とも一致する。一方で、古代に遡る遺物も散見される点は、大堀川の対岸に林ノ腰古墳が存在した点と関連するとも考えられる。

なお、今回の調査成果から本発掘調査の必要性が高まったため、開発事業者に対し本発掘調査実施に向けて協議を要請した。(井上)



調査区 1 遺構面検出状況



調査区 1 北西壁堆積状況

20. 小篠原遺跡



調査区 2 遺構面検出状況



調査区 2 北西壁堆積状況



調査区 2 北東壁堆積状況

21. よし じ やく し どう 吉地薬師堂遺跡

調査地 野洲市^{ろくじょう てらがき}六条字寺柿 889 番、891 番
調査原因 中間処理施設
調査期間 令和 3 年 3 月 22 日・3 月 23 日

1. 調査に至る経緯

吉地薬師堂遺跡は古墳時代から室町時代にかけての集落跡として周知されている遺跡である。遺跡名は、範囲内に「薬師堂」という字名が存在することに由来するが、寺院に関わる遺構・遺物は見つからない。市道野洲・マイアミ線の東側一帯は、旧中主町時代に土地区画整理事業に先立ち大規模な発掘調査が実施されているほか、本調査地の周辺でも工場や大規模小売店舗建設に先立ち発掘調査が実施されている。しかし、本調査地は遺跡の西端に位置するためか、近隣ではあまり発掘調査が実施されていない。調査地は六条墓地に隣接しており、東側一帯は工場用地となっている。

今回の調査は、清掃業者の中間処理施設建設に先立つもので、建物基礎のうち、パイル杭が打設される位置に調査区を 3 箇所設定した。調査面積は計 22.5㎡である。

2. 調査成果

以前、建物が建設されていた敷地東端は造成土とみられる山土が見られたが、その下は砂が堆積している。それ以外の場所ではアスファルト直下から砂の堆積が続いている。粒子の大きさや含まれる礫の量などには差はあるものの、いずれもほぼ同色であり締まりはない。深さ約 1.3m 付近まで掘削したが、少量の磁器片が出土しただけで、明確な遺構は検出できなかった。また、吉地で顕著にみられるグライ化した青灰色粘質土は、調査区 1 などで大きなブロックとして存在したのみで、面としては検出できなかった。

本調査地の近隣では、平成 25 年に工場建設に先立つ試掘調査、平成 30 年に個人住宅建設に先立つ試掘調査が実施されている。平成 25 年の調査では 6 箇所の調査区を設定しており、地表面下 1.3 ～ 1.6 m 付近で灰色系の砂または砂礫、あるいは青灰色系の粘土を検出している。平成 30 年の調査



図1 調査地位置図

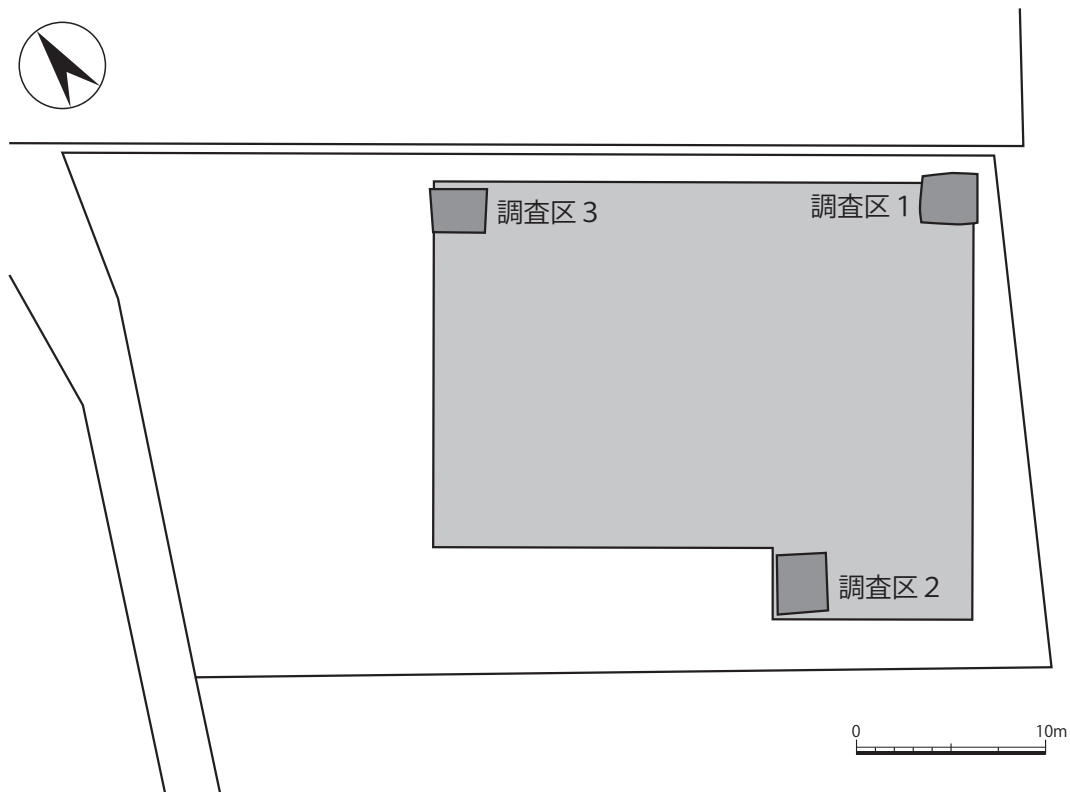


図2 調査区配置図

では、地表面下約 1.3m で褐灰色シルト層を検出している。いずれの調査でも遺構は検出されていないが、土師器や須恵器などの破片が出土している。

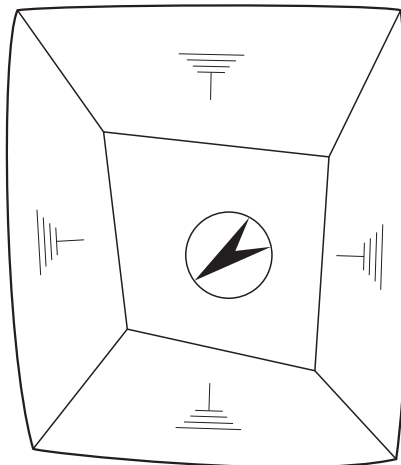
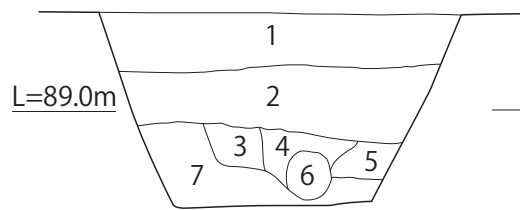
3. まとめ

平成 25 年の試掘調査の結果報告でも示されている通り、顕著な遺構や遺物が見られないことから、本調査地が遺跡の縁辺に位置することは間違いないと考えられる。しかし、本調査地の堆積は地表面直下からほぼ砂礫とっていい具合である。そこで気にかかるのが、平成 25 年に実施された試掘調査の報告で挙げられている灰色系の砂または砂礫の存在である。この調査地では盛土が 1 m 程度施されているが、その下に砂礫層が相応の厚さで見られるという。その理由として、昭和 28 年 9 月に発生した野洲川大洪水があげられる。

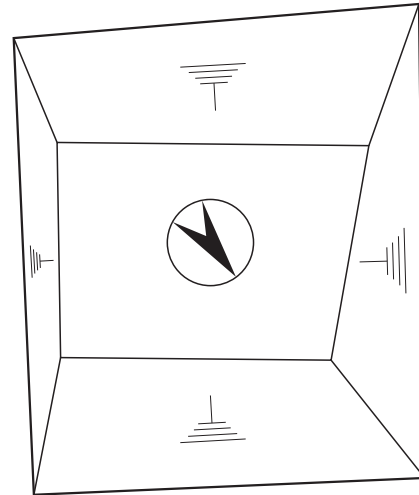
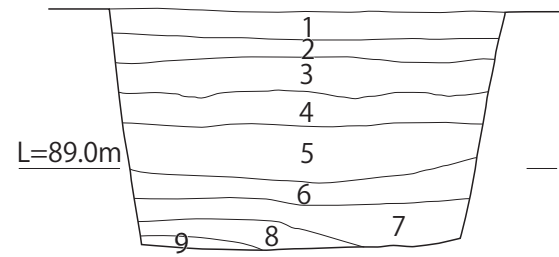
本調査地は旧野洲川北流に接しており、堤防が決壊した場合は真っ先に被害を受けるような立地である。調査を実施する際、関係者から調査地が当時、堤が決壊したまさにその位置で、現在の六条墓地はその洪水堆積の上に新しく設けられたものだという旨の話が合った。本調査地と隣接する六条墓地との間はほとんど高低差がなく、本調査地は洪水堆積の真上に位置することになる。そのような土地に何ら手を加えることなく造成したことについては違和感がなくもないが、施主からの聞き取りでは以前は駐車場のように使っていたとのことであり、重量のある構造物を設置することが無かったために、地盤改良等を行うことなく土地利用がなされていたのであろう。

したがって、本調査地は昭和 28 年の野洲川大洪水の際に河道となっていたものと考えられる。本来の生活面はさらに深いところにあるか、洪水の際に攪乱されたかのいずれかであろう。（井上）

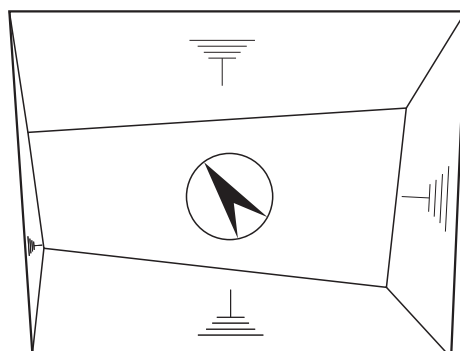
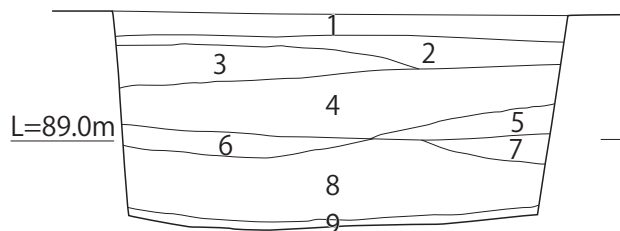
調査区 1



調査区 2



調査区 3



【調査区 1】

- ①整地土
- ②暗灰黄色 (2.5Y4/2) 小礫混じり中砂
- ③暗灰黄色 (2.5Y4/2) 小礫混じり中砂
- ④暗灰黄色 (2.5Y4/2) 小礫混じり粗砂
- ⑤暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中砂
- ⑥暗灰黄色 (2.5Y4/2) 強粘質シルト
- ⑦暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中砂

【調査区 2】

- ①アスファルト
- ②造成土
- ③暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂
- ④暗灰黄色 (2.5Y4/2) 礫混じり細砂
(③より締まりがない)
- ⑤灰黄褐色 (10YR4/2) 礫混じり粗砂
- ⑥暗灰黄色 (2.5Y4/2) 礫混じり中砂
- ⑦暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質シルト
- ⑧暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 弱粘質シルト
- ⑨暗緑灰色 (10GY4/1) 細砂混じり粘質土

【調査区 3】

- ①アスファルト
- ②灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 中砂混じり細砂
- ③黄灰色 (2.5Y5/1) 中砂
- ④灰黄褐色 (10YR5/2) 礫混じり粗砂
- ⑤暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト
- ⑥暗灰黄色 (2.5Y4/2) 礫混じり中砂
- ⑦灰色 (7.5Y4/1) 中砂
- ⑧黄灰色 (2.5Y5/1) 中砂
- ⑨暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中砂 (水分多い)

図 3 調査区平面図・土層断面図

21. 吉地薬師堂遺跡



調査区 1 完掘状況



調査区 1 堆積状況



調査区 2 遺構面検出状況



調査区 2 堆積状況



調査区 3 完掘状況



調査区 3 堆積状況

22. 常楽寺遺跡

調査地 野洲市富波字馬場乙 379 番、380 番
調査原因 個人住宅
調査期間 令和 3 年 4 月 15 日

1. 調査経過

常楽寺遺跡は、野洲市富波に所在する中世の寺院を中心とした集落跡と周知されている。

本調査地は、宅地造成に先駆けて令和 2 年度に擁壁敷設部分で発掘調査を実施しており、溝やピットを確認している。

調査は個人住宅建設に伴う試掘調査で、建物建築範囲に 3.0m × 2.0m、約 6.0㎡の調査区を設定した。

2. 調査成果

地表面下約 1.8m まで掘り下げた結果、造成土の下に改良材の影響を受けた土が堆積しており、地表面下約 1.2m（標高約 91.8m）から硬くなり、地表面下約 1.8m（標高約 91.2m）からは非常に硬いという状況であった。これ以上の掘削は不可能であったため、記録をとって調査を終了した。

令和 2 年度に擁壁敷設部分で実施した調査では、標高約 91.37m で遺構面を確認している。本調査区においても、ほぼ同じ高さで遺構面が存在していたと考えられるが、堆積土は改良材の影響を受けて硬くしまっており、遺構面は確認できなかった。遺物も出土しなかった。

3. まとめ

造成土直下から改良剤の影響を受けた土が堆積しており、周辺の調査事例から推定される遺構面のレベルよりも、約 0.2m 低いレベルの土が非常に硬く固められている状況から、地盤改良工事によって遺跡が破壊されたものとみられる。

(芦塚)

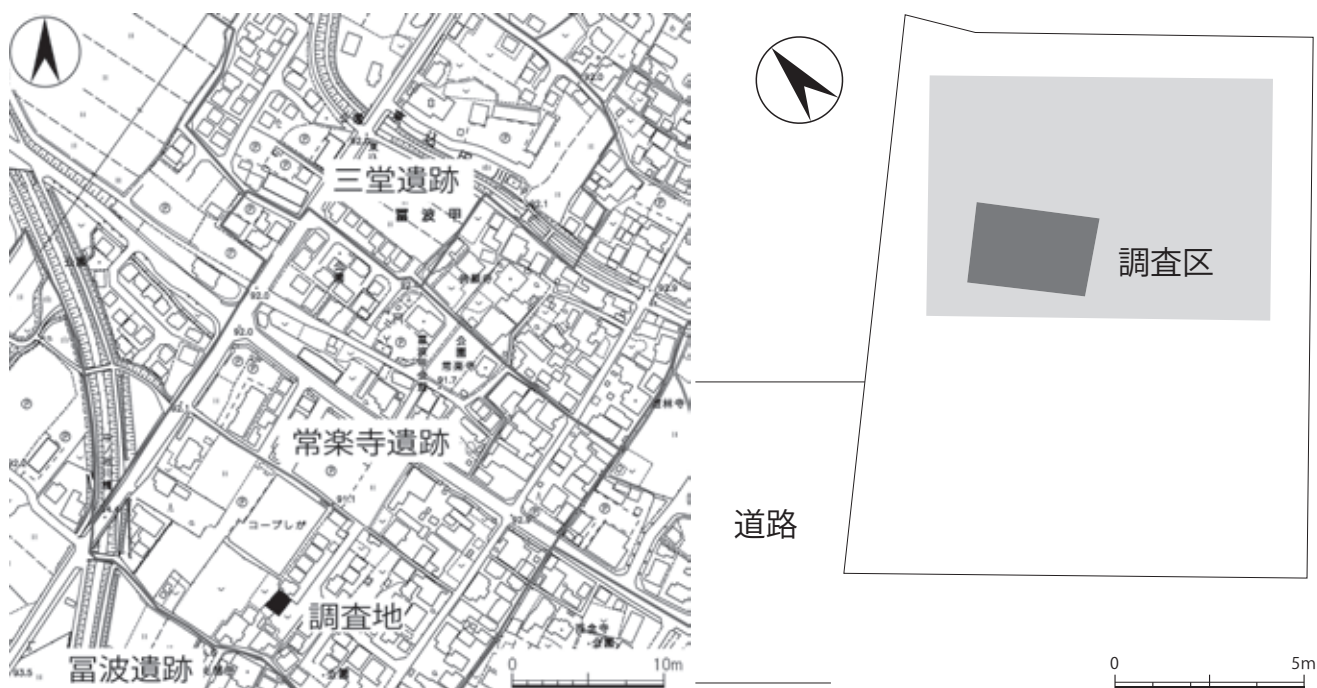
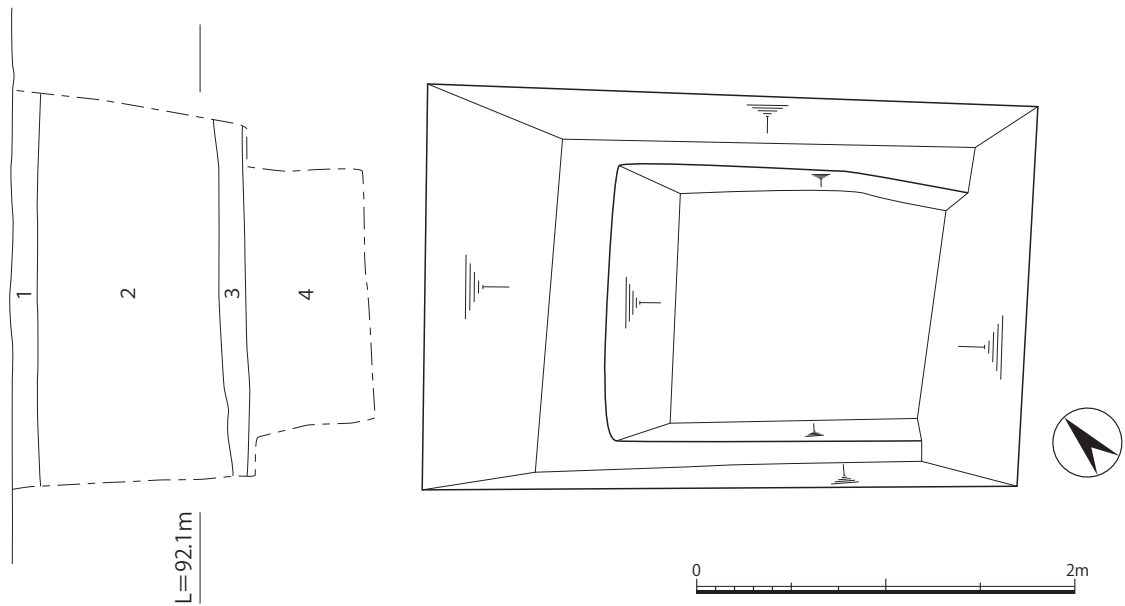


図 1 調査地位置図・調査区配置図



1. 造成土
2. 暗褐色(10YR3/3)粘質土(改良材の影響をやや受ける)
3. 暗オリーブ褐色 極細粒砂(改良材の影響を受ける、混入物が多い)
4. 黒褐色(10YR3/2) 砂(改良材の影響を受けておりとても硬い、混入物が多い)

図2 調査区平面図・土層断面図



掘り下げ状況（北から）



西壁土層断面